

【138】

氏 名	藤 本 暁 ふじ もと さとる
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 153 号
学位授与の日付	昭 和 39 年 12 月 22 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	未熟児の出生に及ぼす社会環境的要因の影響に就いて

論文調査委員 (主 査) 教 授 西 尾 雅 七 教 授 永 井 秀 夫 教 授 西 村 敏 雄

論 文 内 容 の 要 旨

Anoxia, Hypoxia を主体とする宮内死亡、頭蓋内出血で代表される分娩時障害による死亡、さらには肺換気異常による死亡などいずれも未熟児に高率であることは衆知のところであり、またこれらを除外した対象についての乳児期以後の発育に関する継続調査からも、未熟児は身体的発育のみならず精神的発育に関しても成熟児に較べて多大の Handicap をもっていることが報告されている。かくのごとく未熟児は常に生命の危険にさらされる度合が成熟児に比して極めて高く、またその間種々の不利益を背負うものである以上、これの出生を予防することこそ未熟児対策の正しい姿だと思われる。ところで未熟児出生に関する諸要因のうち医学的要因は比較的詳しく研究されているのに対して社会環境的要因（妊婦の生物学的ないし日常生活の諸条件等を含めたもの）に関する報告は少なく、今なお明らかでない点が多い。著者は昭和33年6月から37年5月までの間、国立京都病院に来院した妊産婦を対象にして、非妊時の生活状況を出発点として妊娠の全経過を観察し、すべての対象に著者が個々に面接調査を行ない、明らかに医学的要因の影響が認められる場合を除外して未熟児の出生に及ぼす社会環境的要因の影響を系統的、組織的に解明せんと試みた。

さて広義の未熟児には狭義の未熟児と早産児とが含まれ（虚弱児は除外した）、前者は生下時体重に、後者は在胎期間に基づく分類である。著者はこれらを総括して新たな概念から満期産未熟児（満未）、早期産未熟児-A（早未-A）、早期産未熟児-B（早未-B）の3群に区別し、これに満期産成熟児（満成）を加えた4群について検討を加え、次のごとき知見を得た。

まず肉体労働は妊娠全期を通して満未、早未-A および B の全群に影響を及ぼす。その中でも妊娠前期の労働の影響は特に満未の出生に、妊娠中、後期の労働の影響は満未および早未-A の出生に強く現われる。早未-B の出生に及ぼす労働の影響は前2者に比して軽いが、なかならず、妊娠中期以後の影響を受ける。また満未、早未-A 群には特に妊娠中期以後の母体の栄養摂取の不足が強い影響を与えるようである。

これに対して精神労働の影響は案外少なく、妊娠に対する関心度および知識の程度はいかにほとんど関係せず、また性生活の影響もそう大きなものではないように考えられた。しかし家庭生活の経済的水準を規定することにもなると考えられる父親の職業に関しては、満未および早未-A 群では満成群に比して知的職業階層に属するものが少なく、労働者階層に属するものが多く、また早未-A および B のいわゆる早産群では農業者階層に属するものが多い傾向を認めた。

以上の結果から、家庭の経済状態そのものが妊婦の意志とは別に妊婦の労働、栄養摂取状況、その他未熟児の出生に重要な関係をもつ因子の量および質を規制していることを認めた上で対策はたてられなければならない、単なる妊婦に対する妊娠時の衛生に関する教育や指導のみでは解決できないものがそこにひそんでいることを暗示しているように思われる。

論文審査の結果の要旨

著者は未熟児対策の正しいすがたは未熟児の出生の予防からはじまるべきものであるとの見地から、未熟児の出生におよぼす、妊婦の生物学的ないし日常生活の諸条件をふくむ社会環境的諸要因の影響を検討した。

昭和33年6月から37年5月までの間に京都国立病院に来院した1052名の妊産婦を対象として非妊時より分娩までの全経過について観察し、医学的要因の影響が認められたものをのぞいた776例について19項目におよぶ社会環境的要因の影響を統計学的に検討した。著者は在胎期間別新生児限界体重表を作成し、これをもちいて未熟児を満期産未熟児、早期産未熟児-A、早期産未熟児-Bの3群に分け、これに満期産成熟児を加えた4群について比較検討を行なったのである。その結果妊娠前期の労働は満未の出生に、妊娠中後期の労働は満未および早未-Aの出生につよく影響すること、妊娠中期以降の母体の栄養摂取は満未および早未-Aの出生に、また父親の職業は家庭生活の経済水準を規定することをつうじて未熟児の出生に影響することを明らかにした。

本論文は未熟児対策の発展のうえにまた未熟児研究の進展に貢献するところがきわめて多く医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。